



泰山木

ホームページ

<http://www.city-takaoka.jp/bakurou/index.html>

学ぶこと

校長 新井 郁夫

最近、子どもたちから学ぶことが多い。以下校内研修会の一こまを紹介する。

2年生の国語のレオニレオニ (Leo Lionni) 作、谷川俊太郎 (たにかわしゅんたろう) 訳の「スイミー」の授業の一場面である。

スイミーは小さな魚。兄弟がみんな赤い魚だったのに、スイミーだけは真っ黒な小魚だった。ある日、大きなマグロにおそわれ兄弟たちはみな食べられてしまった。兄弟を失ったスイミーはさまざまな海の生き物たちに出会いながら放浪するうちに、岩の陰に隠れてマグロに怯えながら暮らす、兄弟そっくりの赤い魚たちをみつけた。スイミーと一緒に泳ごうと誘うのだが、マグロが怖いからと小魚たちは出てこない。そこでスイミーはマグロに食べられることなく自由に海を泳げるように、みんなで集まって大きな魚のふりをして泳ぐことを提案する。そしてスイミーは自分だけが黒い魚なので、自分が目になることを決意するのだった。かくして、小魚たちはマグロを追い払い、岩陰に隠れることなく海をすいすい泳げるようになったという内容である。

先生：スイミーの気持ちや場面の様子を考えながら読もう。
(手を挙げた児童が音読する)

先生：さんの読み方の何が良かったと思った。

児童：「うんと考えた」のところ、「うんと考えた」と、伸ばしているところ。

児童：もう一個ある。

児童：「～いっばーいだよ」と伸ばしている。本当にいっばいな感じがする。

児童：あっていたよ。(音読した児童が手でOKの合図を出し、本当に嬉しそうに大きな声で言った)

子どもたちは思い思いに情景を思い浮かべながら感性豊かに音読をしていた。自分の工夫した読みが、聞いている者にしっかり伝わったときの喜びは例えようもないくらい嬉しい。小学校2年生の子どもが、友だちの音読を聞いて、相手の工夫したことを理解しようと真剣に瞬き一つせず聞き入っている。何とか自分の考えを相手に伝えようと声を大きくしたり、小さくしたりして工夫する子どもたちから、人間関係づくりの基本を学んだ。

授業後の研究協議会では、話し手に目をつなぎ、うなずいたり、メモをとったりしていつもと違う自分に気づかされながら「自分の考えをもち、伝え合う力を身に付ける」本校の研究主題をかみしめることができた。

相手がどのように感じるか、相手の思いはどうかなど考えずに、日ごろ、伝えたいことを淡々と話している自分が恥ずかしくなってきた。改めて学ぶことの大切さを実感するとともに、子どもたちをこれほどまでに夢中にさせるレオニレオニの「スイミー」の原文を読みたいと思ったのは私だけではない。早速、書店に注文した。

レオニレオニ (Leo Lionni) 1910年～1999年
1910年 オランダのアムステルダムに生まれ。
1959年 "Little Blue and Little Yellow" (あおくんときいろちゃん) で絵本作家としてデビュー。
1981年 国際交流基金により、日本に1ヶ月間滞在。
作品には、"Little Blue and Little Yellow" (あおくんときいろちゃん)、カルデコット賞次点の "Inch by Inch" および「スイミー」や、「フレデリック」、「せかいいち おおきなうち」(児童図書スプリングフェスティバル賞)や、1964年最優秀作品として、アメリカ図書館協会の指定を受けた "Tico and the Golden Wings" などがある。

谷川 俊太郎 (たにかわ しゅんたろう)
1931年 東京生まれ。

詩人。絵本や記録映画の脚本も書く。
1952年 第1詩集「二十億光年の孤独」を刊行。
エッセイ集「散文」、子どものための劇「おばけりんご」、詩集「ことばあそびうた」、「空に小鳥のいなくなった日」のほか、翻訳絵本「マザーグースのうた」(日本翻訳文化賞受賞)「スヌーピー」、レオニレオニ作品の「スイミー」「フレデリック」などがある。